

## 外邦図の東北大学への搬入経緯をめぐって

岡本次郎（北海道教育大学名誉教授）

終戦直後に参謀本部などから受領して保存された外邦図の主要なルートは、一つは東北帝国大学理学部地理学教室に送られたものであり、他の一つは資源科学研究所に送られたものであった（久武 2003）。終戦の年に東北帝国大学理学部に地理学講座が創設され、私はその最初の学生の一人であって、教授の田中館秀三先生のご指示で東北大学への搬出に関わったので、その経緯について私の知ることを記し、若干の判断を述べたい。

### 関係者の記録

東北帝大への搬入の経過については、筆者も以前記述したことがあり（岡本 1995）、地図受領業務を指揮した土井喜久一さんが記した当時の回想もある（土井 1975）。私の記述は『東北大学理学部地理学教室創立五十周年記念誌』に寄稿したもので、入学後に経験した多彩な一年間を述べた一文で、参謀本部からの地図搬出は、その中の一つのエピソードに過ぎず、また専ら記憶によって書いたもので、事実関係を充分検証したわけではない。いつのことであったかの記述も明確ではなく、地図の運び出しを承認してくれた参謀の名も記していない。また、土井さんの『田中館秀三業績と追憶一』に記された回想には、明らかな誤りも含まれ、不可解と思われることも示されている。

先般、小林茂先生からご依頼があり、2007年10月27日開催の「第9回外邦図研究会」で、表題の演題でお話しする機会を与えられた。そこで、第一には、限られた条件の中ではあるが、出来るだけ正確な経過を明らかにすることを期し、第二に、このような搬入が出来たことについては、田中館秀三先生のお人柄、渡辺正参謀の見識、土井喜久一さんの行動力という条件があって、はじめて実現できたことと考えていることを示したかった。

東北帝大への搬入の経緯を示すとなれば、その作業の中核を担った土井さんの記述の当否を問題にせざるを得ない。土井さんは、『田中館秀三業績と追

憶一』の中の一文「田中館先生の思い出」で、地図搬出の経緯を次のように記している。

「初めて先生にお会いしたのは終戦後間もない、九月上旬、豪雨の最中の世田谷区成城のお宅であった。（中略）辻村太郎先生の紹介をいただいで初対面であった。東北大学地理学教室の助手としての採用を即決していただき、先生が陸軍参謀本部から貰うように話をつけておられた大量の地図を仙台の教室へ送るよう命ぜられた。」

「それにしても近々米軍がやってくるという追い立てられるような状況で大量の地図を計画的に運び出すのは仲々の仕事であった。多田文男先生と御相談して資源科学研究所と共同とし、研究所からは中野尊正さんほか、東北大側からは第一回学生の岡本次郎、福井英夫、三田亮一などの諸君と（陸軍）気象部の元軍属の女子など合わせて十名足らずで、同一種ごとに十枚を数えて抜き出す作業に、ほとんど休息もなしで約一週間働いた。仙台へ送った地図は鉄道貨車一両に近く、資源研には同じ量をトラック二回で運んだと記憶する。」

このような経過であれば、外邦図搬出のルートは、東北大へのものも、資源研へのものも基本的には同一ということになる。ところが、土井さんの記述は、私の記憶している状況とは、かなり異なっている。資源科学研究所のスタッフと私たち東北大学の学生とが共同して作業を行ったということは全くなく、私たちが一緒に作業したのは、元陸軍気象部の軍属で、男子が2名、女子が2～3名であった。土井さんは終戦時陸軍大尉で、陸軍気象部に勤務し、この人たちはすべて土井さんの部下として働いていた人達であった。

この書籍の刊行は、1975年であり、30年前のことを思い起こしての記述であるから、錯誤が生ずるのはむしろ当然で、福井英夫君はこの作業には全く参加しておらず、また、田中館先生が成城に住まわれたのは後のことで、終戦後の半年くらいは、目白におられた。このような誤りは本筋としては、どうで

もよいことだが、東北大ルート of の担い手であった土井さんと、資源研ルート of の担い手であった中野さんが共同で作業をしたのか否かは、外邦図搬出の主要な二つのルート of の性格に関わる問題となる。

中野尊正さんは外邦図 of の搬出について、このニューズレター No. 2 に、かなり詳細に示しており、「(復員後) 帰京したのは 9 月末か 10 月はじめ。翌朝、帰任のあいさつと今後の仕事の指示を仰ぐため、多田先生のお宅に伺った。多田先生は、参謀本部 of の渡辺少佐のところに出向いて、地図 of の運び出しをしてくれと指示された。(一部省略)」と記し、参謀本部、明治大学 (参謀本部兵要地誌班 of の分室が置かれていたらしい) で地図 of の抜き取りをして、各 10 面を大妻学園に搬入した経緯を述べている (中野 2004)。

中野さんは、終戦後久留米で復員したが、枕崎台風<sup>1)</sup> などの影響で帰京が遅れたことを記し、帰京の時期については、9 月末か 10 月はじめとしている。これは重要な経験であるから、恐らく間違いのないことであろう。となれば、土井さんが参謀本部で地図受領のための作業を行ったのは 9 月中旬頃であろうから、土井さんの記述にも拘わらず、この時期には、中野さんは東京にはいなかったことになる。

### 筆者の行動

土井さんらによる作業時期を確認する上からも、ここで、私自身の作業への関わりとその前後の行動を記しておきたい。終戦直後の 8 月 20 日から数日、浅虫の臨海実験所で、そこの常駐責任者小久保清治

助教授ほか of の集中講義があり、学生 4 名が受講し、終了後もなお宿舎に滞在して、夏休みを楽しんでいた。8 月末頃<sup>2)</sup>、田中館先生が来られ、翌日大湊の海軍要港部に行かれて、多量の資材を貰い受けられた。この資材は学生の手で取りあえず実験所へ運び、その中の邦文タイプライターは、理学部の事務室が困っているから仙台に届けるように、また、参謀本部から地図 of を貰い受けようと思っているので、東京に家のある学生は上京するようにとのご指示があった。

大湊からの資材搬出は実験所 of の徳井利信助手の協力も得て、4 名の学生が、客車に運び込んで持ち帰ったもので、3 日間を要したと思われる。そのあと、仙台に寄って上京した。先生に伴われて参謀本部を訪れ、三田亮一君、石光亨君とともに陸軍少佐渡邊正参謀にお会いしたのは、これらの経過から推して、早ければ 9 月 7 日、遅ければ 10 日頃であったと思われる。既に多くの軍人軍属が職場を離れ、この部屋も広い事務室に、渡邊参謀とその部下 (中尉) が執務しているだけであった。地図については、先生は「リヤカー十杯ほど」を貰い受けたい旨申し出て、参謀は快諾し、好きなだけ持ち出してよいという意味の言葉があったという印象がある。

私が育ったのは神田三崎町で、父は製本工場を営み、私達は小規模工場としてはごく普通の階下が工場と倉庫、二階が住居という構造の家屋に住んでいた。私が東北帝大に入学して間もない 1945 年 5 月 25 日の空襲で罹災したが、類焼であったため、ある



図 1 硫黄島の空中写真 (一部)

程度の荷物を持ち出すことも出来、父たちは、300メートル余り離れた西神田の店舗付き住宅を借りて住んでいた。リヤカーも無事で、地図搬出にはこのリヤカーを使った。

田中館先生は、神田神保町1丁目、スズラン通り商店街の南裏にあった貸事務所の2階を借りて、「事務所」と称しておられた。ここへ地図を運び込んだのだが、参謀本部からこの事務所までは、約4キロメートル、西神田の仮寓となっていた建物も、両者を結ぶ線からあまり離れていなかった。石光君はその後殆ど参加せず、三田君と二人で作業に当たった。

田中館先生からは、あとで整理して他大学等に分けるため、一図幅10枚ずつを抜き出すように指示されていた。地図の選定には格別なご指示はなかったように思う。実際に収集した地図は、二十万分の一帝国図、一万分の一地形図東京近傍・横浜近傍、五万分の一集成図<sup>3)</sup>など陸地測量部作成の地図と、二百五十万分一ソ連邦地図、ヨーロッパなどの百万分一地図など各種の編輯地図、航空図などと白地図が多く、五万分一の普通の地形図は参謀本部にはなかった<sup>4)</sup>。外国の官製地図を復刻編集した大縮尺地図は非常に多くの種類に上るので、とても手に負えず、空中写真測量などで日本軍が作った応急測量による五万分一地図の一部などと共に、見本として少数を持ってきた。先生もこのような大縮尺地図が、アラスカ、ハワイ、東南アジア、印度に及ぶ広大な範囲に亘って作成され在庫していることは、はっきりとは認識されてはいなかったようで、これらをお目にかけて、「人を雇って作業をやらせよう」と言われた。

一日に何回くらい運び出したかは記憶にないが、「学生気分」での仕事の進め方であったから、1日2回くらいであったのだろう。土井さんは、作業を開始する前に、この事務室を訪れており、この時点で専ら私達学生の手による作業は終了した訳で、最終的に「事務所」の一隅に積み上げられた地図の量は印象に残っている。自転車の後ろに付けるリヤカーは大きなものではないから、それこそ10杯以上にはなっていたかと思う。即ち、5~6日くらいの運搬量であろうか。それならば「事務所」への運搬は9月13日から15日くらいの間に終わっていた可能性が



図2 参謀本部から「事務所」への経路

(一万分一地形圖東京近傍十九号「日本橋」[1930年測図・1937年修正測図・1939年発行]の一部、および、一万分一地形圖東京近傍二十七号「四谷」[1909年測図・1939年第4回修正測図・発行年不明]の一部、右側が北である)

大きいと言える<sup>5)</sup>。土井さんの指揮による作業は、多分その翌日から始まった筈である。

### 土井さんの活動

田中館先生からは「リヤカー十杯と言ったのは、あまり欲張るとくれないかも知れないと思ったからで、戦果拡大は君らがやり給え」と伺ったことがあったが、大縮尺外邦図の見本をご覧になった段階で、全面的な収集をお考えになったのだと思っている。恐らく、土井さんへは「リヤカー十杯」の話はなさらずに、全面的な収集を指示されたのだろう。そうでなければ、直ちに4~5名の人を呼び集めて、組織的な作業を始めるといふわけにはいかなかった筈である。なお、当時は復員者は巷に溢れ、定職に就ける人は限られていたから、日当を払うとなれば、人集めには苦労はなかった時期であった。

土井さんが作業を始めると、状況は一変した、作業者の分担が定められ、筒状に丸められた地図は不要な地図で梱包され、図幅の区分などが記され、運び出されることなく床に山積みされていった。地図のリストアップは土井さん自身が担当し、男子の要員の一人が代わることもあった。三田君と私は自主的に作業に協力はしたが、定時に出勤するというような携わり方ではなかった。

この作業は、多分一週間を要せずに終わったのではなかっただろうか。そうすると、作業の終了は9月20日から22日あたりということになる。地図の梱包を山積みしたトラック（何台目かは確認してない）が出て行った後、渡邊参謀の部下の中尉が、地図の送付先とリストとを提出するように求めてきた。これは私が書いて提出したが、地図の送り先は東北帝大だけである。

27日には天皇がGHQにマッカーサーを訪問し、その時の写真を掲載した新聞を内務省が発禁処分にしたため、翌朝の新聞が配達されなかったことがあった。私はこの日まだ東京にいたが、10月からは授業が始まるので、ほどなく仙台に発った。

地理専攻学生のための教室と学生控室とは、入学時には臨時教員養成所（数学）の一教室を間仕切りして使っていたが、7月10日の仙台空襲で数学教室が被災したため、私が仙台にはいなかった時だが、

この教室は終戦後間もない時期に数学教室に返され、地理の部屋は地質教室の標本室の一室が当てられていた<sup>6)</sup>。9月末か10月はじめのことになるが、私が初めてこの新しい地理の部屋を訪れたとき、既に、物置然とした部屋の一角には、地学標本の運搬箱を整理しておく棚に囲まれて、梱包されたままの地図が高く高く積まれていた。当時教室には、労務を担当する青年が1~2名いたので、この地図についての労役には、学生は携わる必要はなかった。

後日、土井さんから伺ったところでは、地図が到着したとき、発送リストと現物との照合をしたわけではなく、日本の五万分一地形図、二十万分一地勢図など、早期に整理すべきものは取りのけ、その他は分類せずに積み上げた。従って、発送したものが全部届いたかどうかはわからないということであった。

色々検証してみると、土井さんが指揮した外邦図搬出の東北大ルートと中野尊正さんが奮闘した資源研ルートは時期的に重ならないと判断されたが、作業担当者については、土井さんの記述と中野さんの記述とは大きく相違し、納得できない問題として残っていた。

### 土井さんのメモ

「第9回外邦図研究会」の後2ヶ月ほど経った2007年年末に、私宅の書庫の一部を片付けたところ、偶然一冊のファイルが見つかった。その中に十数枚の外邦図インデックスや、土井さんの手になるメモなどがあった。土井さんのメモは、参謀本部などからの地図搬入の経過、その後の整理状況を記したもので、東北帝國大学の縦書き罫紙を使って横書きしてある。土井さんは「カナモジカイ」の会員で、この文書も漢字交じりのカタカナで記述し、分かち書きがなされている。以下にその全文を掲げる。

#### 地図ニ就テ

1. 参謀本部 ヨリ 受領シタ 地図ハ 現在 第一復員省 復員官 元 陸軍少佐 渡辺 正 氏 (兵要 地誌 班) ヨリ、田中館 教授ガ 受領サレタ モノデアッテ、最初ハ 学生 岡本、三田 両君ガ 作業ヲ ヤリ、後 土井ガ 引ツイデ、旧陸軍氣象部 軍属 4



名ヲ使用シ約半月ノ作業デヌキトリ、荷造、発送ヲ行ツタ。又、同部ヨリトラックヲ2日間無料デ借用シタ。又、コノ作業ハ資源科学研究所 中野 尊正、入江 達夫 両氏 以下 数名モ 協同シタ。内地五万 分ノ一ハ 参本ニ ナイノデ 第一総軍 ヨリ 受領シタ。

其ノ後 明大分室ニ アッタ 地図デ 補足スルモノヲ 探シテ 受領シタ。コレハ 主トシテ 航空図、印度、ビルマ方面 5万、内地 2万5千 デ アッタガ、輸送中 一部 紛失シタ 疑ガ 大デアル。作業ハ 資源研ノ 人ニ 依頼シ、コチラカラハ 旧 軍属 1名ガ 出タ。

2. 図ノ 内容ノ 詳細目録ハ 未完成デ 原稿ハ 資源研ニ 送ッテ アルガ、両方デ 整理シ、目録 ヲ 完成シタラ 不足ノ 地図ヲ 相互交換スル 約束デ アッタ。

記憶 ニ ヨッテ 書イタ 概要ノ 目録ハ 別紙ノ 通りデ アルガ、此ノ 外 広範囲ノ マトメタ 地

図 (例 2000 万 アジア大陸図) モ カナリ アリ 教育上 便利ナモノモ アルト 思ハレル。 又、白 地図モ 相当 アッテ 作業ニ 利用シ得ル デアラ ウ。

3. 内地ノ 5 万ハ 相当欠ガアリ、特ニ 関東ハ 殆 ドナイ。之ノ 代リニ 輯製 5 万ヲ 貰ッタ 筈 ノモノガ 紛失 シテ居テ 出テ コナイ。 整理ハ 北海道 ヲ 除キ 本州 以南 ヲ 3組作り、1組ハ 仮綴シ 他ノ 2組 ノ内 1組ノ 北東日本ノ 分ノ ミ 岩石教室ニ 渡シタ。残りハ 1 -23 ノ 箱 ニアル。

4. 満州ノ 10 万ハ 一ツニ 集メタガ 目録ノ 図ガ ナクテ ソノママ。 他ハ 大抵 目録 図ガ アルカラ、コレデ 整理スル 予定デ アッタ。

貸出ハ 浅虫ノ 小久保 助教授 ト 中央气象台 大和田出張所 ガ 外ニ 出テイル分デ、他ハ 学生ニ 少数 (貸出簿) 出テイル。代用板式ノ 整理ガ 便利ノ 様デアル。

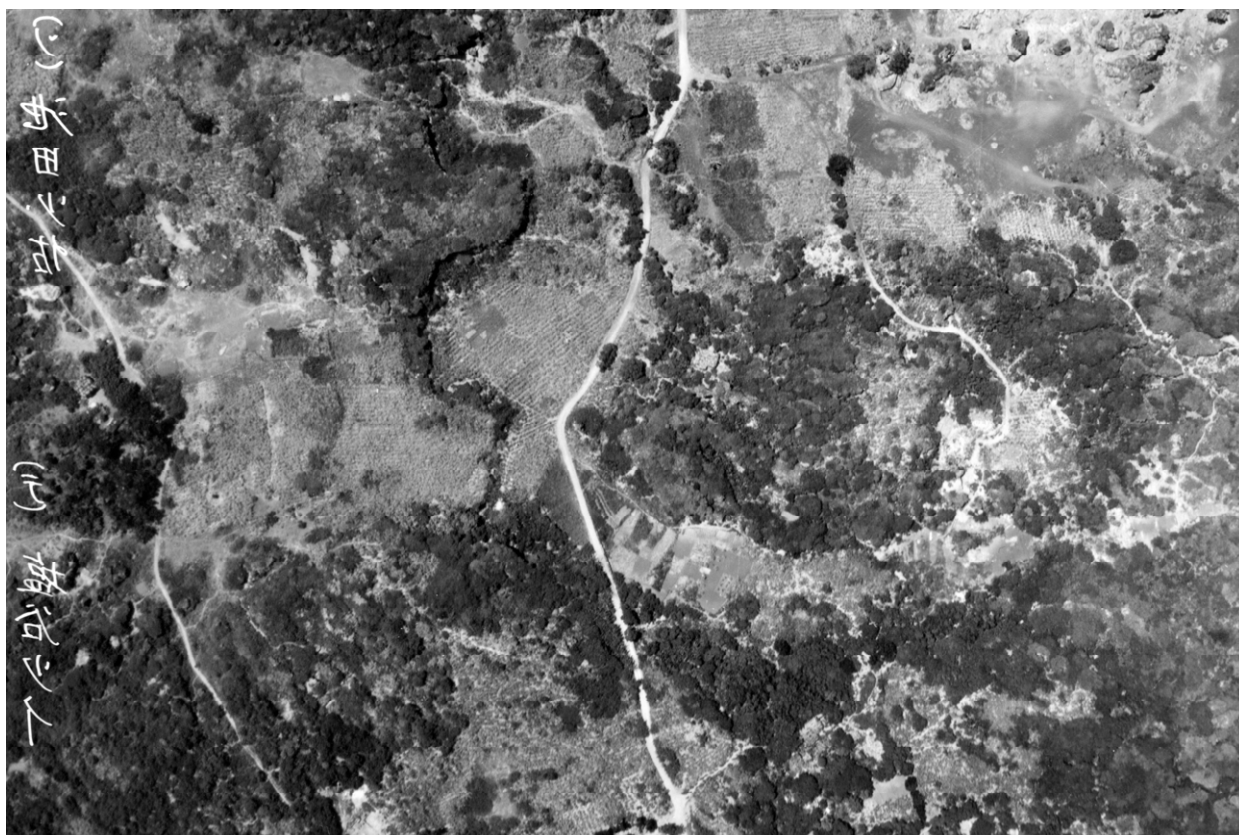


図3 硫黄島の空中写真 (一部)  
左側は、操縦者 (ソ) と偵察者 (テ) の氏名。

このメモは、土井さんが退職にあつたって、私に残されたものであろうと思われ、このメモと一緒に出てきた 12 枚のインデックス図は土井さんから受け取ったものか、後述する廃棄物の中から私が拾い出したものかは分からないが、後者の可能性が大きい。なお、土井メモ中にある「概要ノ目録」は見あたらない。

土井さんの退任は 46 年 11 月頃であつたから、地図搬出から 1 年あまりの時期であり、作業の様子などは前出の資料より正しく書かれている。しかし、ここでも資源科学研究所の中野尊正、入江達夫（入江敏夫か？）両氏以下数名も協同した旨が示されている。30 年前のことを記したのならば、ほかの話との混同が生じたということもあろうが、1 年ほど前のことを記したのであれば、全然無関係なこととの混同とは考えにくい。

まず、ここに示されている所では、参謀本部で作業を行ったのは、土井さんのもとで作業をした陸軍気象部の元軍属 4 名であり、資源研職員数名は協同したと表現されていて、必ずしも一緒に仕事をしたということではないようである。

次に、トラックを 2 日間借りたということだが、参謀本部からの積み出しに 2 日間が必要だったとは考えにくい。東北大へ運ばれた地図の量を考えると、トラックに 1 台では積みきれないだろうから、2 度に分けて運んだものと思われるが、2 日にわたって運んだとは考えられない。ここに「二日間」とあるのは、参謀本部からと明大分室からとで 2 日間だったのか、9 月と 10 月とに 1 日ずつで 2 日間だったのではないだろうか。

明大分室での作業には、私たち学生は全く関わっていない。土井さんが受領したのは、「其ノ後」とあるから、参謀本部での作業に引き続いて、明大分室での作業が行われたのではなく、日を改めて行われたものと思われる。事実、参謀本部から仙台に送った地図の受け入れのためにも、任官にあつたの手続きのためにも、また住まいを定めるためにも、土井さんは参謀本部から地図を発送した後、ひとまず仙台に赴かなければならなかったはずであり、その後、東京の住いを引き払うこととなろう。それならば、「其ノ後」というのは、恐らく 9 月末か 10 月に

入ってからのことであろうから、その時期に「多田文男先生と御相談して資源科学研究所と共同とし、研究所からは中野尊正さんほか」の人と協同する機会があつたというのなら、よく理解できる話となる。

土井さんが記されたことには二つの時期の作業に関して混同があり、中野さんの場合は、古い記憶の想起であるから、特に印象に残っていた「孤独な作業」「腕力の発揮」が前面に出て、土井さんその他の人との協力については思い出されなかったのであろうと、私は推測している。即ち、参謀本部からの地図搬出は、東北大ルートは 9 月中旬、あるいは 20 日前後あたりに、資源研ルートは 10 月上旬あたりに、それぞれ別個の作業で行われ、明大分室からは 10 月上旬あたりに、両者の連携を伴って行われたのではあるまいか。

いずれにせよ、東北大、資源研の両者の整理が進めば、不足地図を相互に交換することが約束されているくらいだから、作業の共同は部分的であつたにせよ、作業時点から連絡連携が取られていたことは明瞭であろう。

なお、参謀本部における作業期間は「約半月」と記されているが、そのように長期に亘るものではなかった。既に街には進駐軍将兵が闊歩するようになっている時期に、いつになるのか不明だが、ともかく進駐軍に接収されるまでという時間的な制約を感じながらの慌ただしい作業であつて、後年記されたように、たかだか 1 週間というのが真相であつたに相違ない。土井さんの指揮による参謀本部での作業開始から、前述の推定による明大分室での作業終了までならば、半月以上の期間に亘った筈で、「半月」とされたのは、9 月の参謀本部における作業開始と、10 月上旬の明大での作業終了とのご記憶をもとに記されたものではあるまいか。

東北大へ運ばれた地図のうち、参謀本部測図の五万分一地図などは早期に整理された。その年の演習の時間に、学生各自が地図をそれぞれ手元に置いて、辻村太郎著『日本地形誌』の読み合わせをしたことも思い出される。田中館先生は 1946 年 3 月停年退職され、土井さんは 1946 年秋、愛知県で療養中の奥さんを気遣って退任された。もし土井さんがその後引き続き東北大に勤務されていたならば、恐らく外邦図

の多くも順次整理されていったと思われるが、実際には土井さんのメモにあるような段階で整理は中断し、長期の放置を見たのであった。

### 廃棄物の中から

以上、粗筋を述べたが、このほかに私が参謀本部内で収集した資料が若干ある。それはある一室が廃棄物の集積場所になっていて、「米軍に見られたくない」と判断したものがあつたら、ここに捨てて置いてくれ、あとで焼却する」と聞いていた。

作業の合間に、捨てられているものを見ると、大変貴重と思われるものがあつた。その一つは硫黄島の空中写真(82枚セット)、それから作ったと思われる一万分一地図、この空中写真撮影時に撮られた硫黄島の空中からの俯瞰写真12枚(昭和19年8月19日撮影)であつて、地図は、今の用紙規格で言えば、ほぼA0版にあたる大きさの用紙に印刷され、「軍事極秘 戦地ニ限り極秘」と示されていた。これらは焼却してしまうのはいかにも勿体ないと思つたが、米軍進駐後間もない時期で、軍機保護法の廃止も聞

いていなかったのもので、了解を得て貰い受けることはできないと思ひ、無断で持ち出した。今にして思えば、ここは宝の山で、貴重な資料となるべきものが沢山あつたのではないかと思うが、無断持ち出しの気重さもあり、一二度短時間探索しただけだつたように思う。

ここから持ち出したものには、上記の硫黄島関係のほか、少なくとも次のものがあつた。

- 「戦用地図配布(総軍ヨリ各軍へ) 状況一覧 昭和十九年三月 南方軍總司令部」の綴り
- 五万分一地形図「横須賀」など要塞地帯の地図(軍事極秘) 若干
- 「大東京鳥瞰写真地図」 これはオフセット印刷 一万分一空中写真地図(日本空中作業合資会 社撮影、博文館発行、発行日不詳、官公庁以外非売品) 48面の綴りである。
- 「南洋委任統治領秘密地図一覧図(昭和十九年製版)」などの索引図若干

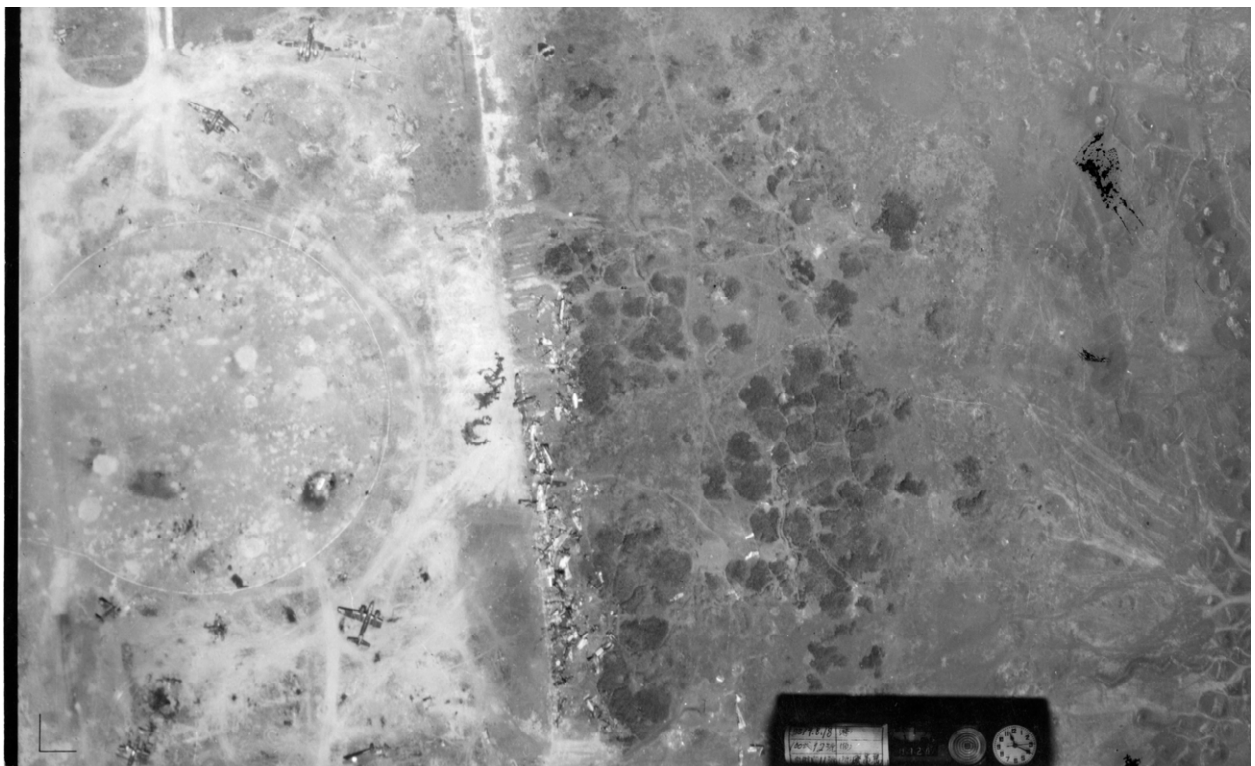


図4 硫黄島の空中写真(一部)  
破壊された飛行機がみえる。

## 外邦図の大量搬出ができた条件

終戦直後の時期に、参謀本部から地図を貰うというようなことは、誰もが発想できるものではなかったことであろう。当時の状況のもとでは、この発想は大変大胆なものであったと思われる。東京周辺在住の地理学者には「兵要地理調査研究会」などを通じて交流があって、参謀本部兵要地誌班の渡邊参謀とは旧知であった方も少なくない筈だが、これらの方々も、直接参謀本部を訪ねて、組織的に多量の地図を貰い受けるようなことはされていない<sup>7)</sup>。多田先生も地図搬出の措置を取られたが、先に述べたように、土井さんが多田先生を訪ねたのは、参謀本部や第一総軍からの地図を仙台に送った後と思われ、土井さんの報告を受けて、貴重な地図の受領ができることを知られた上で取られた措置であったと思われる。

田中館先生は大変自由闊達な発想をされる方で、見通しの良さは定評があり、行動力と即決は真骨頂であった<sup>8)</sup>。終戦の”玉音放送”を聞いた直後に、祝賀会をやると言い出されたり、その席で、予め予定はされていたものの、いつ開かれるとも決まっていなかった海洋学の集中講義を来週開いて貰うからと、浅虫臨海実験所での受講を指示された。戦争終結という事態に即刻対応された訳である。終戦直後という時期に、高松宮から猪苗代湖畔のご別邸の土地の一部を貰い受けて、そこに臨湖実験所を建てるという構想を抱き、大湊の海軍要港部から建物の解体資材その他を貰い、建築資金は日本発送電からという方針で、早くも活動されていた<sup>9)</sup>。

田中館先生は、ひとたび使命感を帯びると、利害得失に拘泥せず、何事を置いても目標に邁進するご性格で、外邦図に関しても、今後の学術調査にかけがえのない資料となることを感じられると、直ちにその保全を志されたものに相違ない。

作業者に対する手当、運搬費、「事務所」の維持費などは、どこからも支出される筈もなく、これらはすべて田中館先生が私費で賄われたものであった<sup>10)</sup>。ここにも利害得失に拘泥せず、為すべきことは為すという先生の気質の現れがみられる。

他方、渡邊少佐は、終戦時に参謀本部陸地測量部を改組して、内務省所管の地理調査所に改組するこ

とを提言し実現させた人であり、地形図等の焼却に反対した人であり、終戦時に管掌していた多くの資料を、自宅に保全された人であった。占領地や作戦地の貴重な地図を含む大きな地図コレクションを、大学という資料保存に好ましい施設に保全されることは、望むところであったのではなかろうか。参謀本部で外邦図などを所管された人が、渡邊少佐でなかったならば、地図の搬出を、あのように実現することはできなかったのではあるまいか。

そして、土井さんの実行力。この人がいなかったら、東北大への作業を組織的効率的に行うことはできなかった。田中館先生は、辻村太郎先生の紹介で訪ねてきた土井さんを、その場で助手に採用することに決め、直ちに地図の作業を指示された。土井さんは行動的な方で、この時は東京に在住しており、数週間前までの部下であった、きびきびと働く人達を呼び集めて作業を指揮した。この活動があって、初めて最大限の地図収集ができたものである。

資源研ルートについても、多田先生の渡邊参謀とのお付き合いは、「兵要地理研究会」設置準備以来のものであり、資料の重要性を感じ取られると、直ちに手配を尽くされ、中野さんという実行力ある方の行動を通じて、大量の資料搬出ができたものであった。

いま顧みると、外邦図が大量に保全されたのは、常にあり得るとは言えないような幾つかの条件が満たされて、はじめて実現されたことであったと言わざるを得ないのである。

## 注

- 1) 枕崎台風は、1945年9月17日鹿児島県枕崎付近に上陸、日本を縦走して、希有の被害をもたらした。
- 2) 8月28日に、米軍先遣隊のアイケルバーガー中将与日本側代表の有末中将与の間で、占領軍進駐に関する打ち合わせが、厚木飛行場の天幕内で行われた。通訳を務めたのは田中館先生で、写真入りの新聞を見せて下さった。浅虫に来られる前に、仙台に寄られており、奥さんが寄寓しておられた岩手県金田一村（現・二戸市）にも立ち寄って来られた可能性があるから、先生の浅虫到着は、早ければ8月30日、遅



くとも9月1日であろうと推定される。

- 3) 作戦用地図としては五万分の一図は範囲が狭いので、4面分を合わせた地図が作られ、1キロメートル間隔の方眼が加えてあった。
- 4) 参謀本部には五万分の一図は前記の集成地図が揃っていたが、通常の五万分の一図はなかった。三田君が第一総軍の地図室に行って、北海道から九州に至る5万分の一地図3部づつを貰ってきた。第一総軍の司令部は、参謀本部と同じ敷地にある別棟で、私も行ってみたら、地図室には若い軍属が一人おり、台湾の地図一式貰えないかと言ってみたら、明日までに揃えておくと気さくな返事があった。これらの地図は「事務所」にではなく、西神田の仮寓に運んだ。
- 5) この地図は、結局は東北大へは送られなかった。土井さんの指揮による作業が始まると、組織的な収集が行われたので、これらの地図は不要になり、西神田の仮寓に運び、その一部は現在も私が所蔵している。
- 6) 田中館先生は法文学部の講師をしておられたので、その研究室は法文学部の木造校舎にあったが、7月10日の仙台空襲で焼失した。
- 7) 田中館先生は、「兵要地誌研究会」のメンバーではなかったが、渡邊参謀とは、親密であり、戦争末期に、東北帝大理学部にて地理学講座を設置されるについては、「国防地理学」の研究を柱とすることが標榜されていて、渡邊参謀の後押しがあったことを、先生から伺ったことがある。
- 8) 『田中館秀三—業績と追憶—』には、20名の人名による田中館先生の追憶が掲載されているが、変事に処して卓見を示し、ずば抜けた行動力を発揮するお人柄を活写したものに、元シンガポール博物館長E・J・H・コーナーによる『思い出の昭南博物館』がある。この書物のはじめの三分の一ほどは、昭南博物館と改名したシンガポールのラッフルズ博物館で、田中館先生が館長として活躍し、前館長コーナー氏らの協力を得て、文化施設の保護にあたった時期のことが書かれている。

田中館先生ご自身は戦時中に『南方文化施設の接収』なる一書を著しておられるが、それによれば、先生は東北帝大から燐灰石調査のため仏印に出張を

命ぜられ、昭和17年2月はじめ仏印に着き、同月11日南方軍司令部の高官と会談する機会を得、塚田参謀長に、占領地の図書資料の保全に努めるべきこと、特にラッフルズ博物館・図書館及び植物園を戦火から救出する必要を説いた。15日の南方軍囑託の辞令を受け、その日の夕刻シンガポールの英軍は降伏したが、翌16日空路シンガポールへ、17日市役所に豊田司政長官を訪ね、18日ラッフルズ博物館長コーナー氏を伴って博物館を接収、次いで植物園を接収したとある。

この日のことを、コーナーは生涯忘れられない日とし、次のように書いている。「それは一人の男の登場としてはじつに鮮やかであった。・・・任官辞令書も紹介状も持たず、突然シンガポールに姿を現した男が、一瞬のうちに自分で自分の存在を正当化し、占領直後の博物館長と植物園長として位置づけることに成功したのである。」そして、この日に「田中館教授がシンガポールに到着していなかったら、博物館や植物園はどうなっていたであろうか。自らを無報酬の博物館長にひそかに任命し、印を作り、軍の占拠する建物のなかに突入し、軍の貼紙を破り、自ら書いた掲示を貼るといふ無謀きわまりない冒険をしていなかったら、博物館と植物園を日本軍と掠奪の群盗の手から守ることはできなかったであろう。」と。翌年9月、徳川義親侯爵が館長に就任して、間もなく帰国されたが、この間の文化財保護とさまざまな事件処理に挺身し、英国人科学者を保護し、彼らと親交を重ねたことを、コーナーは克明に記している。

- 9) この企画は、皇室財産が国の管理になったため、当初の形では実現はしなかったが、数年後に東北帝大理学部附属「開発地理学研究施設」として結実した。
- 10) 先生は、整理を終わった地図は他大学などに分与し、費用の一部は、いずれは回収できるとお考えだったかと思うが、短時日のうちに整理が完了する見通しがある訳ではない。現実には、全く先生個人のご負担に終わった。

## 文献

岡本次郎(1995): 地理学教室創立の年。『東北大学理

学部地理学講座開設 50 周年記念誌』, 64-74  
E・J・H・コーナー著 石井美樹子訳 (1982) : 『思い出  
の昭南博物館』 中公新書  
田中館秀三 (1944) : 『南方文化施設の接收』 時代社  
田中館秀三業績刊行会編 (1975) : 『田中館秀三一業績  
と追憶一』 世界文庫  
土井喜久一 (1975) : 田中館先生の思い出, 『田中館秀  
三一業績と追憶一』 世界文庫, 第三編 追憶 25-26

中野尊正 (2004) : 外邦図と私とのかかわり, 外邦図研  
究ニューズレター No. 2, 50-53  
久武哲也 (2003) : 旧資源科学研究所所蔵の外邦図と日  
本の大学・研究施設等所蔵の外邦図との系譜関係,  
外邦図研究ニューズレター No. 1, 15-20  
渡辺正氏所蔵資料集編集委員会編 (2005) : 『終戦前後  
の参謀本部と陸地測量部 一渡辺正氏所蔵資料集  
一』 大阪大学文学研究科人文地理学教室



図 5 硫黄島の空中写真 (一部)